

一般社団法人

日本国際看護学会 NEWS LETTER



第7号 2024

Japanese Society for International Nursing
NEWSLETTER, 7th Issue, 2024

2024年3月発刊

理事長挨拶

森 淑江 一般社団法人日本国際看護学会理事長
群馬大学名誉教授

2024年1月1日の能登半島地震により亡くなられた方々に心からお悔やみ申し上げご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様へのお見舞いを申し上げます。

新しく年を迎えるたびに、昨年はどうだったかと我が身を振り返りますが、この1年間、会員の皆様にはどのような変化がありましたでしょうか？日本国際看護学会は大きな転機を迎えました。本学会は研究会および任意団体の学会として27年間の活動の後、2023年4月3日に法人化して一般社団法人日本国際看護学会となり、学会としての基盤を整えることができました。

2024年の今年は初めて首都圏を離れて、九州の地で学術集会が開催されます。ようやく全国に会員をもつ学会としての形が整いつつあると感慨深いものがあります。

本学会の会員数はまだ200名弱と決して多くありませんが、数にとらわれず、会員の皆様お一人お一人の活動が充実できているかを常に重視したいと考えています。学術集会に参加し、国際看護に関する研究成果や活動について発表したり、学会誌に投稿したり、何らかの形で活動することができるような仕組みを本学会は作っていかねければいけません。

国際看護という分野では、世界情勢や国際関係が人々の健康や支援活動にどのような影響を与えているのかを考え、世界共通の目標を常に意識して活動することが望ま

れます。各地で起こる大災害では本学会会員の中にも支援活動に派遣される方もいるでしょう。このように国際社会の動向に注意を向けることは他の看護の分野と大きく異なり、会員の皆様と意見交換して行きたい点です。

日本国内には多くの外国人が居住しており、「多文化共生」を前提とした外国人医療・看護の推進も本学会が取り組む課題の一つです。

多くの課題を抱える本学会では今後も会員の皆様の活発なご活動を期待しております。



1月に10数年来の友人のモンゴル看護評議会議長/モンゴル医科大学教員が研修のため来日した時の写真です。4年前にはチェンマイでの学会で偶然会いました。国際看護活動は新たな友人を得るきっかけともなります。

国際看護と私

国際看護に携わるきっかけやご経験、思いなどをご紹介します。

李孟蓉

一般社団法人日本国際看護学会理事
高崎健康福祉大学保健医療学部看護学科

本学看護学科は2006年度の開設時より、1年次生の必修科目として「国際看護論Ⅰ」という科目を設けており、そして、2015年度に「国際看護論Ⅰ」から「国際看護学」をスタートさせ、国際看護に取り組んでもう早18年が経とうとしています。

私が本格的に国際看護に関わるようになったのは、2011年度からでしたが、2008年3月に、学生の海外研修プログラムを模索するために初めてインドネシアに行ったことがきっかけでした。インドネシアの空港に降り立った時に見る街並みがどこか、私の生まれ故郷に似て、懐かしさを覚えました。そして、バンドンとジョグジャカルタにある看護系大学を訪問し、学生交流のプログラムについて、話し合いを重ねてきました。大学の看護教員や職員との関わりを通して、多くのインドネシアの国民が信仰しているイスラム教の文化や人の優しさに触れ、話す言語に違いがあるものの、この地球でともに生きている看護の仲間であることを再認識いたしました。一方で、インドネシアの健康課題にも気づくことができました。

インドネシアから帰国後、学生をインドネシアへ派遣する研修を計画し、海外派遣研修における学生交流を通じて、また、授業等でグローバルヘルス、異文化理解などに対する国際看護教育、インドネシアの健康課題について研究に取り組みました。派遣研修や研究活動などで現地の人々との交流、インドネシアの看護教員との出会いが私にとって国際看護への第一歩となり、また知り合ったインドネシアの方々がかけがえのない存在となりました。



次ページへ続く



国際看護と私

続き | 李孟蓉_国際看護と私

本学が位置する群馬県の在留外国人数は60,749人と、県人口に占める外国人住民の割合は3.1%と、全国の外国人人口に占める割合2.2%より高く、全国3位になっています。また、国籍別ではブラジルが最も多く、次いでベトナム、フィリピンの順で、約112カ国および地域の外国人住民が暮らしています。（群馬県ホームページ、総務省統計局令和2年国勢調査）。

特にブラジル人が多く暮らしている大泉町は、人口の約19%を外国人が占める外国人集住率の高い地域であり、ブラジル人学校があります。ブラジル人学校は、日本の学校保健安全法が適用されないため、ブラジル人学校に通う子どもは、公立学校に通う子どもが受けられる児童生徒等の健康診断が受けられず、健康について考える機会が持てません。そこで、本学は地域貢献事業として、教員は学生と一緒に大泉町役場との連携でブラジル人学校に通う子どもたちの健康維持や疾患の早期発見のために健康診断等を行っています。そして、国際看護学の授業で大泉町役場の職員をゲストスピーカーとし

てお招きし、大泉町が多文化共生に対して行っている取り組みを紹介し、学生に多文化共生社会について考えるきっかけとしています。

今後も学生とともに微力ながら内なる国際化や、世界が取り組んでいる持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）で、「地球上の誰一人取り残さない」ことの目標を実現すべく、日本国内・国外の看護職とともに手を携えて、地球上に暮らす人々の健康を守ることに力を尽くしていきたいと思えます。

そして、今日に至るまで一般社団法人日本国際看護学会の前身、国際看護研究会当時からの日本の国際看護学の発展に尽くされてきた先生方・会員の皆様より学ばせて頂き、大変感謝しております。今後も引き続きよろしくお願い申し上げます。



シリーズ 海外情勢 その1

このシリーズでは、海外で活動される方々のお話を中心にご紹介しています。
今回は国際看護活動の一つとして、特定非営利活動法人ISAPHの「現場」へのお誘いです。

いまこそ、力を合わせて、国境のない看護実践の継続的な「現場」を

佐藤 優 特定非営利活動法人ISAPH 事務局長

特定非営利活動法人ISAPHは、「世界のどこで生まれても自分の健康を自分で守ることができる社会」を目指し、アフリカ、アジア、そして日本の保健医療の課題に草の根レベルで取り組んでいる。母体は、福岡県久留米市にある社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院で、ISAPHの活動に従事する邦人職員（2023年末：7名在籍）のほとんどは当病院から派遣されている。私たちの国際協力事業は、住民主体の地域保健活動・ヘルスプロモーションの実現、適切な保健医療サービスの提供のための伴走支援が中心となる。またそれらを通じたソリューションの開発も意識している。小規模な団体のため裨益者の数も限られるが、事業の成果は科学的視点で分析し、支援する地域以外も裨益できるようにエビデンスの創出も目指している。前号のニュースレターで秦野准教授が言及してくださった「現場」は、まさに我々の活動地だ。このような国際看護・国際協力の現場が、本学会においても大切な意味を持つのではないかと思料し、2023年に組織を代表して本学会に入会した。本学会の定款に掲げる「国際看護の発展」に寄与できるよう、当事者として、これから精力的に取り組みたい。

さて本寄稿では、草の根NPO/NGOの視点から、国際看護・国際協力の「在り方」の転換について、僭越ながらアイデアを共有したい。その前に、背景となる2つの事実を

取り上げる。まず一つは変化する日本社会である。労働力人口が著しく減少する我が国は、国力を維持するために外国人材を受け入れ、共生する社会を目指さなくてはならなくなった。2070年には人口の1割が外国人になる、という厚生労働省（国立社会保障・人口問題研究所）の発表はまだ記憶に新しい。これまでは「外国人や国外の健康問題に取り組むのは個人の選択」という視線が強かったかもしれないが、看護の対象を全人的に捉えることは「外国人をありのままに理解することも当たり前に含まれる」ことを意識する必要性が増すのではないだろうか。世界の健康問題に意識を向けたり、異なる文化や言語を持つ人々への対応経験を積んだりすることは“特別なこと”ではなくなりつつある。



現地の人々に向き合い、異文化・異言語を理解する貴重な「現場」

海外情勢 その1

続き | 佐藤 優 いまこそ、力を合わせて、国境のない看護実践の継続的な「現場」を

もう一つは変化しない現実だ。国境のない医療・看護実践の場は、殆ど変化していない。2022年に発表された「NGO データブック2021」では、1990年以降、新規NGOの設立が急激に減少していること、職員の待遇・福利厚生が課題が引き続き指摘されている。第一歩としての、JICA海外協力隊のようなボランティア活動への道は開かれているが、その経験を更なる実践技術として昇華させる場は、果たして十分にあるだろうか。NPO/NGOに何年も勤めることが出来るかもしれないが、待遇等を考えると全ての人にとって現実的な選択肢ではない場合も多い。そうすると、教育・研究機関や、中央レベルでの政策策定プロジェクトなどの選択肢に目が向くが、看護実践の「現場」としては一部の側面と言える。国際看護・国際協力の現場に限られている実態は、数十年前から変化していない。

この現状の転換として、我々のようなNGOと医療機関等が連携して「**共にプロジェクトを実施する**」未来を提案してみたい。これまで我々は、現地に派遣する邦人職員を聖マリア病院からのみ受け入れてきた。しかし現在は、医療機関や大学等とパートナーシップを結び、この「現場」に参画する機会を広く開くように方針を転換している。現地政府との関係構築、現地NGO登録、現地職員リクルートや活動費など、国際看護・国際協力を実践するために必要な基盤整備（費用含む）はISAPHが負担する。パートナー機関には、医療従事者等を専門家として派遣していただき、一緒にプロジェクトを運営するスタイルを案内している。医療機関や大学等は、活動費などの負担

無く派遣した職員について、(1)異文化対応能力（Cultural Competency）に関する実践経験、(2)日本語以外の言語への対応経験を積ませることができる。加えて、これらの経験は、(3)医療機関・大学等のブランディング、リクルートの強化、更なる国際展開にも戦略的に活用できるだろう。

「国際看護・国際協力に従事したいけど、退職・休職が条件と言われている」という話を聞くことがある。この垣根こそが、国境のない看護実践への大きな障壁ではないだろうか。今後の日本を考えれば、国際経験がある看護師こそ時代のニーズに沿った存在であり、医療機関等も当事者となって「現場」で活動するチームとの連携するのはいかがだろうか。もちろん、経験を積んだ医療従事者が、帰国後、どのように外国人診療や病院等の国際化の課題に貢献するかも重要な論点であるが、この点に関しては聖マリア病院の経験を共有できるだろう。

本寄稿を読んで、私たちと一緒に活動をしてみたいと思われた方、詳しく話をしてみたいと思っただけの方は、是非、御一報いただくと光栄である。



仲間を通じて、ひとを全人的に捉えることを体験する「現場」

シリーズ 海外情勢 その2

食と健康は切っても切れない関係にある。国が変われどそれは同じであることを感じさせられます。カンボジアより、美味しいお話を頂きました。

「カンボジアノゴハン」

前原とよみ カンボジア料理家・看護師

「ニャンバイ・ハウイナウ？」（もうご飯食べた？）

家を出るなり顔見知りのご近所さん達が声をかけてきます。これは私の日常の風景。もし、「食べてない！」って答えると、「どうしたの？うちでご飯食べていきなさい」ってご飯に招待してくれます。こんな優しい挨拶をするのは、東南アジアにあるカンボジア王国です。

私の暮らしている街は、世界遺産のアンコールワットがあるシェムリアップです。この国に魅せられたのが2000年。実際に暮らし初めて19年目になります。

私がこの国の何に魅せられているのか？ それは「食」です。日本でも看護師の傍「食」の勉強をしていましたが、カンボジアには日本よりも色濃く昔ながらの食文化が残っており、それはとても興味深いものです。

カンボジアの一般的な食事は、山盛り白飯にスープ。それに白飯が進む濃い目の味のおかずが少しという構成です。カンボジアにはいろんなスープの種類がありますが、それらほとんどは「酸味」のあるスープです。そしてその「酸味」の素材はスープによって厳格に決まっています。同じ酸味だからと適当な物を使うと、本気で注意されます。この「酸味」については、暑い国なので食欲増進の意味もあるかと思いますが、陰陽のバランスで見えていくと面白いです。

陰陽では中庸（真ん中）が良いとされています。赤道直下のカンボジアは暑い国。そこに住む人を+と捉えるなら、「酸味」は-です。またスープには「辛味」を足すこともあり、「辛味」もまた-。陰陽のバランスがとれます。

またカンボジアの人たちは甘い味が大好きです。悪者になりがちな「砂糖」ですが、これも陰陽で見ると-です。暑い国の人(+)が甘い物を好む、もしくは食事に甘い味が多いのは納得できます。果物しかりです。例えばマンゴー。カンボジア人は青いマンゴーを好んで食べます。青いマンゴーは陰陽でいうと-です。面白いのはここからで、その青いマンゴーに彼らは塩と唐辛子を少し付けて食べます。塩は陰陽では+。味の変化もあるのですが、食べる量が多いので、塩をつけることで中庸にもっていくのです。



カンボジアの国民食ヌンパンチョップ

海外情勢 その2

続き | 前原 とよみ「カンボジアノゴハン」

また、栄養教育の支援で、先進国の人
が必ず話すのは、カンボジアは野菜の摂
取が少ないということ。しかしながら実
際に暮らしてみると、日本では見かけな
い木の葉っぱや、ハーブを本当に多く料
理に使用していることが分かります。し
かも、贅沢に一番美味しい柔らかいところ
しか使いません。そしてこれらは、抗
炎症や、抗酸化、など様々な薬効をもっ
ています。紫外線が強いカンボジア、こ
れも理にかなっています。

次に、日本でも最近ブームの発酵食品。
これもよく摂ります。カンボジアの代表
的な発酵食品は「プロホック」です。魚
を発酵させたペーストで、スープや、お
かず、野菜のティップソースなど多岐に
わたって使用でき、食にバラエティーを
加えます。強烈な香りをしていますが、
アミノ酸もたっぷり、みんな大好きな

食材の一つです。

このようにカンボジア人は、日常の生
活の中で自然と体に良い物を選び、また
体にいい美味しい食べ方をしています。
貧しい、貧しいと言われるカンボジアで
すが、実は食はととても贅沢です。核家族
化がまだ進んでいないカンボジアは人との
距離も近いので、食事をみんなでシェ
アする文化も残っています。それは私の
ような外国人に対してもです。彼らはい
つも言います。一人で食べるよりも大勢
の方が美味し、いろんな種類のごハン
が食べれるからいいでしょ。と。

食は身体を作り、人を作ります。その
人は文化を作ります。たかが食。されど
食です。あまりに身近でなおざりになり
がち「食」。実はいろんな事が見えて
きます。あなたの食はどうですか？



村のごハンの様子

在日外国人支援その1

会員のみなさまが行う国際看護活動をご紹介します。今回は、在日外国人支援をテーマとした取り組みをご紹介します。

多文化共生時代に求められる医療環境 ～外国人患者の言語問題に向き合う～

香川 沙由理 成田赤十字病院

成田赤十字病院は近隣に成田空港があるため多くの外国人患者を受入れており、2017年に国際診療科が開設され外国人患者対応を行っています。2022年度の外来及び入院外国人患者数は5505人であり、病院全体の患者の51人に1人が外国人患者という状況です。外国人患者というと旅行で日本を訪れて具合が悪くなったというイメージがあるかもしれませんが、実際は日本で暮らす外国人患者が多いというのが現状です。日本で暮らす外国人の国籍割合は流動的で地域差もありますが、当院の2022年度外国人患者国籍割合は上位からスリランカ、フィリピン、ネパール、タイ、中国となっています。国籍が違えば母語も違い、習慣、文化、宗教なども違いがあります。特に医療現場で課題とされているのがコミュニケーションであり、職員から「英語できないのにどうしよう」と言う声も多々あります。しかしながら英語でコミュニケーションがとれる患者は多くはなく、シンハラ語などアルファベットを使わない日本では馴染みのない言語を必要とする場面が多々あります。そのような背景もあり、現在はコミュニケーション支援サービスを利用して言語問

題に対応しています。コミュニケーション支援サービスとは、タブレットを介して医療通訳者と会話ができる遠隔通訳サービスです。実際に利用した患者・家族からは「言葉が通じて安心した。」、「説明をよく理解することができた。」と満足度が高く、職員からも「患者さんが安心して良かった。」、「患者さんが何に困っているのかを知ることができた。」と外国人患者対応に安堵する声が聞かれるようになりました。医療において言語問題は重要な課題とされてきましたが、時代の変化とともにコミュニケーション手段は大きく変化し、患者・家族と医療者にとっても良い環境が整いつつあることを実感しています。言語問題は患者の安全を守る医療安全にもつながります。政府の方針もあり今後日本で暮らす外国人が増えることが予測されており、それに伴い医療を受ける外国人患者も増え、国籍も多様化することが考えられます。今後も状況に応じた対応ができるよう言語問題に取り組む必要があり、国籍や人種に関係なく安心安全な医療を受けられるような環境作りが重要であると感じています。



スペイン語で帰国できる喜びを語る入院中の患者



インドネシア語の医療通訳を利用した外来診察

在日外国人支援その2

大学における留学生の日本語支援のための教材開発と授業

山元一晃（金城学院大学）・浅川翔子（慶應義塾大学）・
加藤林太郎（神田外語大学）

私たちは、ともに前任校の国際医療福祉大学（成田キャンパス）の同僚で、日本語教師および看護教員という立場から、看護を学ぶ留学生の支援にあたっていました。多忙な看護学生は、日本語の授業が週に1コマ（90分）しか取れないという状況で、留学生が4年間の課程を経てスムーズに看護師になれるようにするためには何をしたらよいか、日々考えていました。

学生支援のための会議において、多くの看護教員から、レポートや行動計画などの実習記録など、ライティング課題の日本語の問題が指摘されました。そこで、私たちは、タスクベースでライティングを学べる教材を開発し、授業を行いました。教材についての詳細は、論文としてまとめており、以下のURLからご覧になることができます。

<https://kinjo.repo.nii.ac.jp/records/1266>

授業やその教材を学生のニーズに合わせてという喫緊の課題があったことから、学生にもヒアリングを行い早急な開発を進め、授業で使い始めました。その後、看護教員と看護留学生にインタビューを順次行いながら、ニーズ調査を行い、その都度改良を重ねていきました。同時

に、看護実習記録の模範例が掲載されている教材をテキスト化して、特徴的に用いられている語や表現を抽出しました。これらの研究から得られた知見は、後から教材に反映していきました。

教材の各課には、「患者情報を収集する」「行動計画を書く」などのタスクが与えられています。たとえば「行動計画」では、不適切な箇所を含む見本を見て、改善すべき点を探します。その後、どうしてよくなかったか、どうしたらよかったかをテキスト内の説明文を参考に考えます。さらに、いくつかの練習問題を解き、模範的なものを確認します。最後に、自分たちで行動計画を書いてみます。書いたら、ペアやグループで見せ合いコメントをします。

この、これまでにはない新しい教材は、学生からも教員からも好評で、提出課題が明らかに読みやすくなったと聞いています。教材を使ってみたい方は、是非、ご連絡ください。

第4課 患者情報を記録する

6ページ

2. 専門用語を使ったり助詞を省いて、シンプルに書こう

病名/診断名	虫垂の炎症
現病歴 (入院目的、治療方針)	○月×日21:00、右の下腹部が痛いことに気がつき、近くにある病院の救急の外来を受診した。検査の結果、虫垂の炎症と診断された。自覚している症状が軽く、汎発性の腹膜炎の炎症がなく、全身の状態が良好であったため保存的な治療の目的で緊急入院となった。

「行動計画」と同じように、「患者情報シート」でも、**シンプルに分かりやすく書きましょう**。実習記録では、「虫垂の炎症」「痛いこと」などは、「虫垂炎」「疼痛」などの専門用語で書かれます。また、「右の下腹部」「自覚している症状」は、「右下腹部」「自覚症状」のように、助詞や連体修飾がない形をよく使います。「全身の状態」「保存的な治療の目的」「緊急の入院」なども助詞を省略します。「気がつく」「軽く」などの動詞や形容詞は、できるだけ漢語（音読みをする言葉）に置き換えてみましょう。改善例①と比べてみましょう。「近医」など、日常ではあまり使わないことばも使うことがあります。

病名/診断名	虫垂炎
現病歴 (入院目的、治療方針)	○月×日21:00、右下腹部の疼痛を自覚し、近医の救急外来を受診した。検査の結果、虫垂炎と診断された。自覚症状が軽度で汎発性腹膜炎がなく、全身状態が良好であったため保存的な治療目的で緊急入院となった。

第4課 患者情報を記録する

7ページ

練習1 助詞を省いたり、専門用語を使って、「現病歴」を書き換えてみましょう。

(1) 看護師国家試験 第106回 午前 第51問 を一部改変

現病歴 (入院目的、治療方針)	3日前から微熱と全身が強く怠いことに気付いたため、病院を受診したところ、肝臓の機能の障害が分かり、急性の肝炎の診断で入院した。1か月前に生のかきを食べている。Aさんはこれまで肝臓に異常を指摘されたことはなく、家族で肝臓の病気がかかった人はいない。
--------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

現病歴 (入院目的、治療方針)	
--------------------	--

(2) 看護師国家試験 第106回 午前 第80問 を一部改変

現病歴 (入院目的、治療方針)	左上の腕骨の頰上骨折と診断され、牽引治療のために入院した。医師からAちゃんと家族に対し、牽引と安静にして横になる必要性を説明した後、弾性のある包帯を使って左の上肢の介達牽引を開始する。
--------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------

現病歴 (入院目的、治療方針)	
--------------------	--

学生だより

看護学生が行う国際看護活動、またはその学びを紹介していただくコーナーです。

第1回は、沖縄県立看護大学の学生からタイでの学びをお話いただきます。

世界の医療を知る

～タイ研修での病院の違い・LGBTQに関する学び～

西本 有希 沖縄県立看護大学 アジア保健医療研究会 サークル長

アジア保健医療研究会は、「国際的視野で保健看護活動ができる能力を養う」という本学の教育目標に基づき、グローバルな視点を身につけ、同時に保健医療・看護についての見識を養うことを目的として活動を行っています。アジアの保健医療の実際を肌で感じ、自身の学びにするために、今年度はタイ研修を企画しました。研修先をタイに決定した理由としては、LGBTQの授業でタイのLGBTQへの考えは非常に進んでおり、日本からもタイへ性別適合手術を目的に行く人がいるということを知ったからです。病院は、授業で講義をしていただいた先生から紹介をいただき、ヤンヒー国際病院に決定しました。ヤンヒー国際病院は、1984年に設立され、30を超える診療科と診療センターを誇るアジア有数の総合病院です。特に、美と健康の総合病院として世界的に有名であり、1ヶ月の平均外来患者数は2,000人。性別適合手術だけでも400件であり、うち150名あまりが日本から来院するなど、アジア最大の美容・健康ホスピタルとして知られています。

当日の病院見学では、病院の先生による講義と病院内の案内をしていただきました。講義では、心の性別と体の性別を適合させるための手術に、“Change（転換）”という言葉を使うのは不適切であると考え、Sex Change Surgery（性転換手術）ではなく、Gender Affirming Surgery（性別適合手術）と呼び名を変えていることや、整形・性別適合手術をする患者さんの思いや手術の仕方を教えていただきました。

病院見学では、ホテルのような綺麗な病室や創傷治癒促進のための酸素カプセル、胸やお尻に入れるシリコンを実際に見ることができました。また、カルテや検査結果を渡すために病院内の各部署を回るメッセンジャーガールがおり、フィギュアスケーターのような服装でローラースケートを身につけていました。ナースのユニフォームも個性豊かで、ミニスカートや首元に大きなリボンが付いていたり、日本の病院では見られない自由さと働いている人の明るさを目の当たりにすることができました。

タイ観光では、街中で様々なセクシャリティをもった方がいて、隠すことなく普通に生活をしている光景をたくさん見る機会がありました。その光景から、タイの人々がLGBTQに対して偏見をもつことなく1人の人間として認め、普通に関わっていることを知ることができました。

タイ研修を通して、LGBTQの患者さんを特別視するのではなく、1人の患者さんとして関わり“その人がその人らしく生きられるようにサポートする”という思いで医療を提供していることや日本で当たり前前の考えや制度も、国が変われば当たり前前ではないことを肌で感じることができ、柔軟な考えを持つことの大切さを学ぶことができました。これからたくさんの価値観や考え方に触れる機会があると思いますが、その1つ1つを大切に、柔軟に対応できる看護師になれるように頑張りたいと思います。



ヤンヒー国際病院の医師や看護師と参加学生
(著者は手前右から2番目)



メッセンジャーガールと一緒に

第7回学術集会報告 1

2023年11月18日(土)19日(日) 第7回学術集会が開催されました。学術集会会長を始め運営に関わった方々にご報告頂きます。

学術集会会長報告

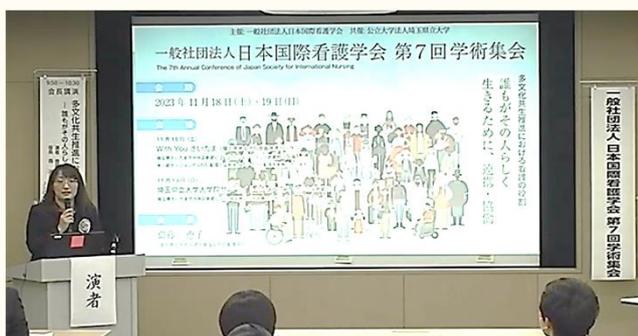
齋藤 恵子

一般社団法人日本国際看護学会第7回学術集会会長
埼玉県立大学

日本国際看護学会第7回学術集会は、「多文化共生推進における看護の役割 ―誰もがその人らしく生きるために、連携・協働―」をテーマに、2023年11月18日(土)と19日(日)に埼玉県内の2つの会場(一部ハイブリッド開催・オンデマンド視聴は12月31日まで)で開催されました。おかげさまで220名のご参加をいただきました。この学術集会は、一般社団法人日本国際看護学会と公立大学法人埼玉県立大学の共催で、さいたま観光国際協会のハイブリッドコンベンション開催助成金の支援を頂きました。4年振りに対面開催が実現でき、プログラムは講演、交流会、懇親会、エクスカージョンを企画しました。

会長講演は「多文化共生推進における看護の役割 ―誰もがその人らしく生きるため

に、連携・協働―」について講演させていただきました。助産師の立場から母国の伝統的慣習に配慮したケアの重要性について、日本に住むラオス人女性を対象とした調査結果を用いて紹介しました。教育講演では「やさしい日本語」の使用によるコミュニケーションの重要性についてスキルにとどまらずマインドが求められていることを具体例を示しながら分かりやすく武田裕子先生(順天堂大学大学院)にご講演いただきました。特別講演(市民公開講座)では、中本進一氏(埼玉大学)にご登壇いただきました。日本社会を留学生の視点から見たフォローアップ調査結果を共有し、日本人に根付いている2極的な概念について気づかされました。



会長講演



中本進一氏の特別講演



第一会場の様子

第7回学術集会報告 1



続き | 齋藤 恵子 学術集会長報告

シンポジウムでは、「多文化共生推進：誰もがその人らしく生きるために、連携・協働」をテーマに「NPO団体として看護学実習を受け入れて」中村義郎先生（NPO法人NGO多文化共生協働センター・川口 事務局長）、「異文化背景を持つ女性とその家族へかかわり：周産期医療施設の立場から」須藤美奈子先生（羽生総合病院 助産師）、「地域在住外国人の日本語学習支援と外国人が活躍できる場の創造」仙部孝一先生（武里日本語教室（埼玉県春日部市）スタッフ）とTrần Thị Thanh Ngân トランティ タン ガン先生（ベトナム語教室担当）の4名からご報告がありました。多文化共生推進のための具体的な事例を通じて連携・協働の重要性が示しました。

JICA海外協力隊活動報告会では、3名の海外での看護活動の経験を共有しました。学生の参加者にとっては直接、活動経験者からのお話を聞く大変貴重な機会となりました。研究委員会企画による交流会や教育活動・研修委員会企画による交流会では、看護学の研究と教育における新しいアプローチを提示いただき参加者の皆様と共有

する貴重な機会となりました。一般演題（口演/ポスター）は合計20題の多様な研究成果、実践報告が発表され、会場での有意義な交流・ディスカッションが行われました。

今回の学術集会最終日プログラムとしてエクスカージョンを企画しました。ベトナム出身の僧侶ティック・タム・チーさんが住職を務める埼玉県本庄市の寺院、大恩寺へのご参拝、交流を行いました。ティック・タム・チーさんから当事者の方々のおかれている環境や困難について教えていただきました。誰もがその人らしく生きるために、文化共生社会の推進が急務でありそのための教育、連携・協働の必要性を改めて強く感じました。

一般社団法人日本国際看護学会第7回学術集会は、多くの皆様のご参加を賜り無事終了いたしました。ご参加くださいました皆様、ご支援・ご協力を賜りました関係者に皆様に心より感謝申し上げます。



シンポジウム：「多文化共生推進：誰もがその人らしく生きるために、連携・協働」



JICA海外協力隊活動報告会

第7回学術集会報告 2



に、連携・協働

盛会、やさしい日本語、そしてバーンガ

山田 智恵里

前福島県立医科大学医学研究科

4年ぶりに対面開催が可能となり、さらにオンラインリアルタイム配信やオンデマンド配信も用意され、参加者数の多い内容の多彩な素晴らしい学術集会でした。集会長の齋藤先生を始め事務局の方々のご尽力の賜物と存じます。個人としては久しぶりに旧知の会員ともお話しできましたし、初めてお目にかかる参加者の方々からお声をかけていただき、楽しくかつ有意義な2日間でした。

現地で参加したプログラムはどれも発表、意見交換も目を見張るものがありました。その中で2つについて感じたこと、考えたことを述べたいと思います。

1つ目は私が座長を務めさせていただいた武田裕子先生の教育講演「やさしい日本語」でのコミュニケーションです。

「やさしい日本語」の重要性とどう言い換えるかの要点がなるほど！と納得しました。と同時に日本語が母国語でない

人々にわかりやすく言い換えて伝えるには、まず専門用語に慣れ親しんだ自分のマインドセットを大きく変えるということだと思いました。次に、これは実際に経験を重ねるごとに簡単になっていくだろうとも予想できました。自分が言い換えに困れば困るほど力がついてゆくものではないでしょうか。

また、在留外国人への看護の経験のない私は、国際看護学授業の中で取り上げる内容を常に試行錯誤しつつ悩んでいますが、武田先生の講演からひとつの大きな収穫を得ました。これは学生の将来に役立ち関心を引き付ける内容で、授業に取り入れようと思いました。後でYouTubeを見ると武田先生の大学と医療X「やさしい日本語」研究会関連のシチュエーションごとの映像もあり、これらも学生の理解を促すのではと、来年度から活用する予定です。



武田裕子先生の教育講演と、座長を務める筆者

第7回学術集会報告 2



続き | 山田 智恵里 盛会、やさしい日本語、そしてバーンガ

2つ目は2日目に参加した教育活動・研修委員会企画の“国際看護学の授業で使える異文化体験ゲーム”です。バーンガという私にとっては初めてのトランプゲームで興味深いものでした。ゲーム中は会話をしないと言われてました。私の入ったグループでは、まずカードゲームのやり方とルールが書かれた紙を読んで、実際にやってみます。次にちょっと違うルールでのやりかたの紙が見せられ、それに従ってゲームを行います。さらにまたちょっと違うルールのやり方を読んで、グループでやってみました。ここで、成績ビリの私は別のグループにトレードされ、そのグループでも誰も話さずにルールの指示はなしでゲーム開始となります。1番目の方は何のカードを出しても良いのですが、2番目の方が出したカードをみて、あ、あのルールだなと判断（推測）していたのですが、3番目の方が出したカードはそれに当てはまらないので大いに混乱してしまいました。グループ内で出したカードが違ってきますとジェスチャーで示す方に、どうして違っているのか？正しいでしょうか？のジェスチャーも返ってきます。どうしたらよいのか？と考えているうちに終了時間になりました。話せないことにもどかしさも感じられました。

全グループが同じルールを見せられていたわけでは無かったかもしれません。トレード後のグループではそれぞれ実は別々のルールで考えていたのかもしれない、だからそれらはどれも間違いではなかったということなのかなと考えました。それぞれが自分なりの

ルールや捉え方があり、異なる文化では別のルールや捉え方がある、それを自覚した時に互いにその背景や理由を理解するためのコミュニケーションが始まるのではないかと感じました。以上のことは主催者側の意図とは異なるかもしれませんが、他の参加者は別のお考えもお持ちになったかもしれませんが、このような体験型企画は楽しく学べるうえに自分なりに考える機会にもなりました。これは、「やさしい日本語」は在留外国人のみならず高齢者や発達障害を抱える方々にも使用できること、と同様に「目からうろこが落ちる」の経験でした。国際看護学とその教育の奥深さも実感し、参加して実に有意義な集会であったことは間違いありませんでした。



異文化体験ゲーム バーンガの様子

第7回学術集会報告 3



日本国際看護学会第7回学術集会を振り返って

辻村 弘美
学会企画準備・実行委員
群馬大学大学院保健学研究科

まずは日本国際看護学会第7回学術集会が盛会に終了されたことについて、大会長の齋藤恵子先生はじめ関係者の皆様にお喜び申し上げます。私自身は企画準備・実行委員として微力ながら準備委員としての役割や当日は受付業務や座長等を務めさせていただきました。また、一方で参加者としての貴重な成果発表の場をいただきました。今回は、委員の立場と参加者の立場から学会を振り返りたいと思います。

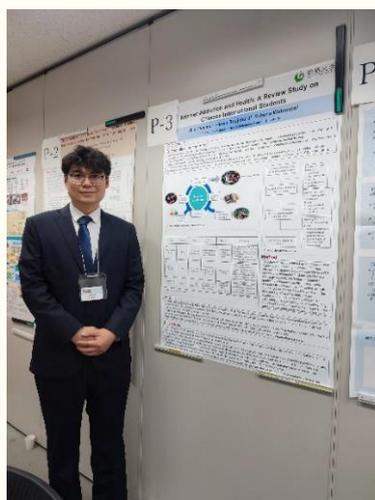
学会前の私の委員として活動は、数回のオンライン会議に参加して意見を申しただけでしたが、大会長や埼玉県立大学の先生方が多くの時間を割き、細やかな準備をされているのが印象的でした。少しでも気になる点があると迅速に関係各所に確認するなど、学会を成功させるという使命のもとに尽力されてる姿に感銘を受けました。

学会当日には活動報告や文献検討に関する発表の座長として、参加者の皆さんと交流することができました。特に留学生が流暢な日本語や英語で発表している現場に触れ、その真剣な眼差しに熱意を感じ、私も頑張らねばと勇気づけられました。

参加者の立場としては、私は「カンボジアとつなぐ国際看護学オンライン実習」というタイトルで活動報告をしました。参加者の方から貴重な質問をいただき、活発なディスカッションをすることができました。昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、オンラインでの実習の報告となりましたが、

来年度の学会では今年の夏に実施した対面での実習について報告する予定です。また、私の指導している中国の大学院生が、「Internet Addiction and Health: A Review Study on Chinese International Students」というタイトルで文献レビューを行い、英語で成果発表をすることができました（写真）。今後この成果をもとに大学院での調査研究に発展させていくことを期待しています。

末筆とはなりましたが、今後の日本国際看護学会の益々の発展を祈念しております。貴重な報告の場を与えてくださり、誠にありがとうございました。



大役を務めた留学生の朱さんのポスター発表の場面です。
今後の研究の進展に期待しています。

第7回学術集会報告 4

ベトナム人らの駆け込み寺、 大恩寺（埼玉県本庄市）へのエクスカージョンへの参加記

山内こづえ 大手前大学／みんなの外国人ネットワーク(MINNA)

第7回学術集会のテーマである「多文化共生推進における看護の役割 ―誰もがその人らしく生きるために、連携・協働―」の一環として企画されたエクスカージョンに参加しましたので、その内容をシェアさせていただきます。訪れた場所は、ベトナム出身の僧侶であるティック・タム・チーさんが、ベトナム人技能実習生などへの支援活動の拠点としている大恩寺です。参加したエクスカージョンでは、まず、施設や大恩寺農浄園という畑の見学を行いました。畑は、周辺地域の人々の協力も得ながら在日ベトナム人技能実習生の方々などが自給自足を行い様々な作物を栽培するだけでなく、栽培した野菜を地域の方にお裾分けするなど交流する場として活用されていました。その後、お寺に移動してタム・チーさんからこれまでの活動についてのお話や、ベトナム人技能実習生たちからお話を伺いました。

タム・チーさんは、東日本大震災から現在に至るまで、困難を抱える在日ベトナム人に対してさまざまな支援活動（人道相談支援、お葬式支援、お念仏を通じた精神的な支援）を行ってきました。コロナ禍となりこれまでの支援活動に加えて、食糧支援、保護支援、帰国支援、仕事に繋がる支援、大恩寺農浄園の支援が加わり、現在計8つの活動を行っています。今回は、新型コロナウイルスが流行してから、それまでの相談者を超える多くの困窮した在日ベトナム人技能実習生や留学生、元技能実習生などに対して

行った支援について語っていただきました。コロナ禍の影響で、突然の解雇やベトナムに帰国することもできず、日本で生活をするのもままならない状態に陥っていました。食べるものにも困っている人が多く、SNSなどで知らせてもらい6万人以上の在日ベトナム人に食料の提供を行ったことなどを話されました。コロナ禍の緊急事態宣言下にあった日本で、ベトナム人技能実習生などの置かれている状況がどれほど過酷であったのかが詳細に伝わってきました。タム・チーさんは大恩寺に助けを求めて来られた人たちからSU PHU（スー フー）と呼ばれています。SUは先生、PHUはお父さんという意味で、大恩寺が実家のような安心した居場所になるよう、お互いに助け合い普通の生活ができるように心がけておられました。実際に週末ごとに大恩寺に帰って過ごす技能実習生がいて、そのような場になっていることを肌で感じた訪問となりました。

最後に、このような有意義なエクスカージョンの企画・開催をしてくださった第7回学術集会関係者の皆様と貴重なお話と案内をしてくださった大恩寺のティック・タム・チー様に感謝申し上げます。また、第7回学術集会事務局の皆様にご相談させて頂き、私が活動に参加しております「みんなの外国人ネットワーク（MINNA）」のブログにも訪問した時のことを掲載させて頂きました。



本堂にてタム・チーさんによる
これまでの活動についてのお話



大恩寺農浄園という畑の見学

お知らせ

第8回学術集会のご案内

日 程：2024年10月5日（土）・6日（日）

会場：J:COMホルトホール大分

〒870-0839 大分県大分市金池南1-5-1

学術集会長：桑野紀子

（大分県立看護科学大学看護学部看護学科）

学術集會事務局：

大分県立看護科学大学看護学部看護学科内

〒870-1201 大分県大分市大字廻栖野2944-9

Email：

kokusaikango2024@gmail.com

第8回学術集會HP

<https://x.gd/kAA2p>



ご挨拶

この度、日本国際看護学会より第8回学術集會長を拝命しました大分県立看護科学大学看護学部の桑野紀子と申します。2024年10月5日（土）、大分市内のJ:COMホルトホール大分にて、学術集會を開催させていただくことになりました。九州では初めての開催となります。

第8回学術集會のテーマは「イーミックとエティックでつなげる国際看護 ～多文化理解は看護の発展にどのように寄与するか～」といたしました。日本でも多文化化、多言語化が進んでいますが、地域社会の本格的な多様化はまだまだこれから、と予測されています。世界情勢もめまぐるしく変化する中、国内外での活動、教育、研究、また、身近な地域貢献においても、今後の方向性について議論を重ねていくことの重要性が増していると思います。学術集會を通じて、参加者の皆さまがこれからの国際看護について互いに多様な視点を得る機会を創出し、未来志向で語り合える場になるよう、準備を進めてまいりたいと考えております。学会2日目のプログラムも鋭意検討中です。決まり次第ホームページ等でお知らせしてまいります。

大分県は“日本一のおんせん県おおいた”を謳う、食と癒しに溢れる豊後の国です。会場は大分駅下車すぐの至便な立地ですので、学会ご参加と併せて少し足をのぼし、温泉めぐり、海の幸や山の幸の食探訪、豊後の自然探訪等も楽しんでいただければ幸いです。

ぜひ多くの皆様にご参加いただき、新たな発見、出会いの場になれば幸いです。企画・準備委員一同、皆様のお越しを心よりお待ちしております。

2024年3月吉日

第8回学術集會長 桑野紀子（大分県立看護科学大学看護学部看護学科）



編集後記

本号では、会員の活動紹介という枠を新設し、「在国人支援」とテーマで2名の方よりご寄稿いただきました。また、国際看護学に興味を持つ学生のフレッシュな活動報告も紹介させていただきました。今後も、会員ホームページ「Yui」などを通じ、広く会員の皆様から記事などを募集していきたいと思っております。皆様からも、「こんな活動を紹介したい」、「こんな国際看護学の一面を伝えたい」などのご意見、さらなるアイデアをお待ちしております。

碓井 瑠衣（日本国際看護学会 広報委員）